[成果情報名]奈良県に適した醸造用ブドウ品種および栽培方法

[要約]醸造用ブドウ「メルロー」、「シャルドネ」は、4～6 月の発芽期から開花期にかけてのべと病の防除を徹底することで、本県でも安定した収量を得ることができる。また、標高は 350m 前後が適していると推測される。

[キーワード]醸造用ブドウ、品種、べと病、標高

[担当]果樹・薬草研究センター

[分類]普及・行政・教育の参考となる技術情報

[背景・目的]

奈良県では近年、ワイナリーが初めて開設されるなど、ワイン醸造への関心が高まっている。一方で、県内でのワイン醸造用ブドウの栽培事例が乏しく、品種適性や栽培方法に関する情報が少ないのが課題である。そこで、今後の生産振興の参考とするため、代表的な品種である「メルロー」、「シャルドネ」及び「カベルネ・ソーヴィニヨン（以下、CS）」について、標高の異なる県内 3 地点、すなわち奈良市の大和茶研究センター（標高約 430m、以下「大和茶セ」）、宇陀市の大和野菜研究センター（標高約 350m、以下「大和野菜セ」）及び五條市の果樹・薬草研究センター（標高約 225m、以下「果樹・薬草セ」）において栽培試験を実施し、栽培適性や栽培方法について検討する。

[成果の内容・特徴]

１．べと病、黒とう病、マメコガネおよびアザミウマ類などの病害虫が発生する。特にべと病（図 3）による被害が甚大であるため、4～6 月の発芽期から開花期にかけての薬剤散布を徹底（後述の栽培暦を参照）することで発生を抑えることが、安定的な収量を得る上で重要である（図 1）。

２．「メルロー」、「シャルドネ」は病害虫以外に栽培上の目立った問題はみられず、本県における栽培適性がある。一方、「CS」は晩生種であるため生育が遅く（表 1）、収量も低い（図 1）。また、果実の酸度が高く、適性上限である 0.8 を上回ったことから（図 2）、栽培適性が比較的低いと考えられる。

３.標高が高い園地(430m 前後)では果粒が小粒化する傾向がみられ、標高が低い園地(225m 前後）では糖度が低下する傾向がある（図２）。そのため、収量と品質のバランスが良く、栽培に適する標高は中間の 350m 前後と推測される。

[成果の活用面・留意点]

１．栽培試験において、供試樹は 2019 年に定植し、2023 年まで調査した。

２．栽培試験は露地での垣根栽培で実施した。また、各試験園地の植栽本数は各品種それぞれ 3 樹（計 9 樹）、樹間は 2m とし、整枝方法は前年枝を一本残して結果母枝とする「ギヨ・シングル」仕立てとした（図 4）。

３．試験結果に基づいた栽培暦を作成し、2024 年 2 月 22 日より、奈良県農業研究開発センターのホームページ上で公開した。URL（https://www.pref.nara.jp/secure/261432/jyouzoubudou.pdf）

[具体的データ]

表１　各品種・地点における生育状況

品種	試験ほ場	発芽期	開花盛期	収穫日
シャルドネ	大和茶セ	4/13	6/10	9/17
	大和野菜セ	4/11	6/1	9/9
	果樹・薬草セ	4/12	5/30	9/17
メルロー	大和茶セ	4/20	6/14	9/17
	大和野菜セ	4/17	6/7	9/7
	果樹・薬草セ	4/15	6/4	9/11
CS	大和茶セ	4/25	6/15	10/9
	大和野菜セ	4/22	6/11	10/6
	果樹・薬草セ	4/19	6/6	10/7

＊2019～2023 年の平均値

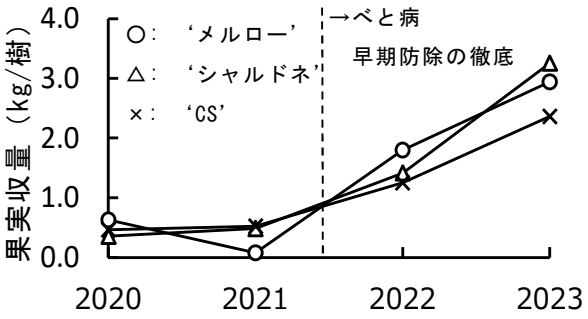

図１　品種ごとの果実収量の推移

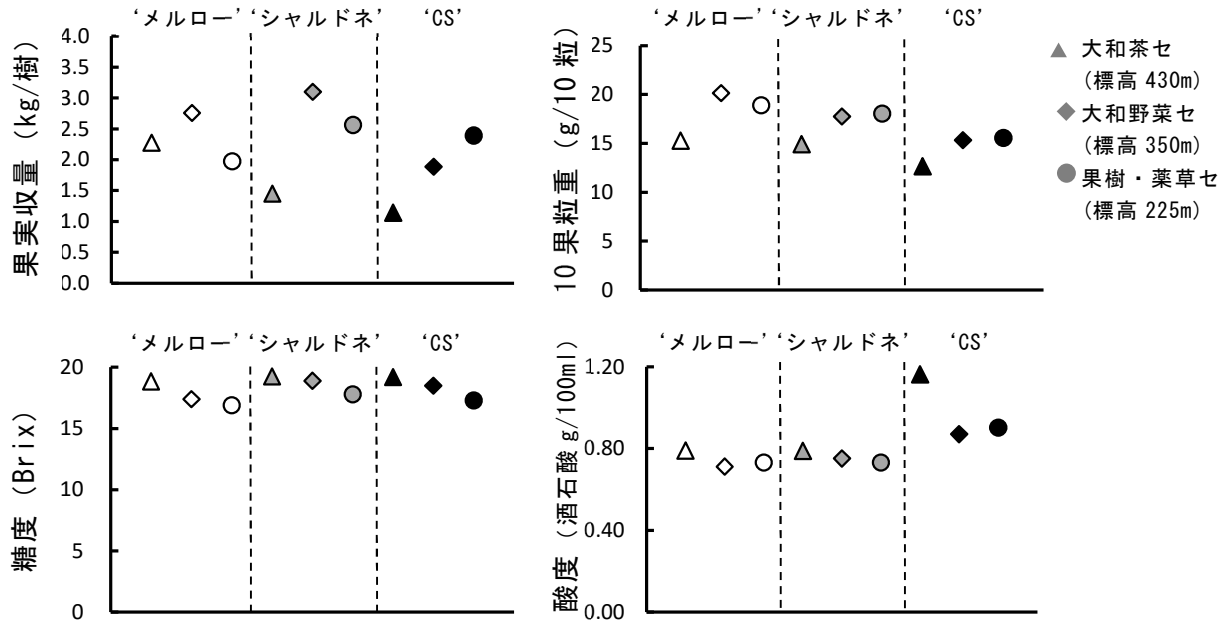

図２　各品種・地点における収量、10 粒重、糖度および酸度の比較
＊2022、2023 年平均データ

図３　べと病が発生した果実の様子

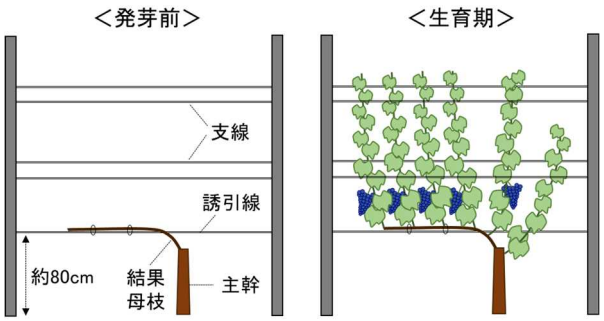

図４　ギヨ・シングル仕立ての概要

[その他]

研究課題名：ワインに適したブドウ品種の果実品質研究
予算区分・研究期間：国庫補助・2019～2022年、県単・2023年
研究担当者：米田 健一、上田 直也、辻本 誠幸
発表誌等：醸造用ブドウ栽培暦（https://www.pref.nara.jp/secure/261432/jyouzoubudou.pdf）